

楡の会こどもクリニック通信第27号(12年10月)

聞き分け無いと映る子の親への親育ち支援心理療法

楡の会こどもクリニック

石川 丹

子育て支援フォーラム in 北海道

～子育ての応援とゼロ歳児からの虐待防止を目指して～

日本医師会 SBI子ども希望財団 北海道医師会

平成24年9月29日

北海道医師会館

初めに

本稿は平成24年9月29日に日本医師会とSBI子ども希望財団と北海道医師会が主催した「子育て支援フォーラム in 北海道～子育ての応援とゼロ歳児からの虐待防止を目指して～」において院長が講演した内容の記録です。

1 聞き分け無い 聞き分け良い

報道によれば、子どもを虐待死させた加害者の殆どは大抵「躰の積りだった」「聞き分け無いので叩いた」と言います。

一方、筆者が十数年前に児童相談所に勤務していた時、虐待のために養護施設に入ってもらった子どもが家庭復帰できる条件は何か調査した際、親が「聞き分け良くなった」「我慢が出来るようになった」と言う場合に家庭に戻れる子供が多い事が分かりました。

子どもが言う事を聞かないからと言って虐待し、危険なので子どもを家庭に置いて置けない施設に入ってもらおうと児童相談所に判断させて置いて、換言すれば、家庭から追いやって置きながら、聞き分け良く成らなければ家庭復帰に応じないと言う親の身勝手さは、何をか況や、であります。

とは言え、聞き分け無いと映る子どもを聞き分け良いと思える子どもに育む事ができるような親の関わり方を親が会得すれば、虐待防止は可能に成るであろうという仮説の下にお話を致します。

2 赤ちゃんは何時から自我を持つか 脱中心化

乳幼児期の子どもの特徴を理解する事が先ずは重要ですので、その点についての二つのお話から始めます。

1983年、イギリスのマレーと言う人は当時未だ無かったテレビ電話を作り、親子には別

室に居てもらって、テレビ中継を介してお母さんに赤ちゃんをあやしてもらいました。赤ちゃんがあやしに乗ってテレビ画像のお母さんを注目したり、ニコニコしたり、キャッキヤ言って楽しそうにして来た所で、赤ちゃんが見ているテレビ画像をあやし行動をしているお母さんのビデオに変えてしまいます。ビデオ画像に切り替えられた事を分かっていない赤ちゃんは、やがてあやし画像に反応しなくなり、ポカーンとしたり、何で？という顔をしたり、そっぽを向いたり、機嫌が悪くなったり、怒って座っているラックをガタガタさせたりしてしまいました。こうした反応は2ヵ月以降の赤ちゃんで見られたそうです。

こうして赤ちゃんは2ヵ月齢で既に自我、“私は私”があり、期待を持てる事が分かりました。人間誰でも期待通り予想通り想定内であればニンマリ、期待外れ予想違い想定外に対してはガッカリです。2ヵ月の赤ちゃんだってそうなのです。期待外れの時は我が強い人であれば怒ってしまいます。我が強い赤ちゃんもいます。

二つ目のお話は、ピアジェと言う高名な発達心理学者が述べた脱中心化という概念です。赤ちゃんは誰でも自己中心性が強い存在、換言すると、自己中の塊、で、通常発達の子は成長して4~5歳になると自己中心性が弱まり、折り合いを付ける、相手の顔を立てる、妥協、我慢が可能になります。自己主張をし捲^{まく}っていた発達段階から交渉妥協ができる発達段階に発達するのです。いわゆる反抗期が終わるという事です。この乳幼児期の心理発達過程をピアジェは“脱中心化”と称したのです。脱中心化は発達がゆっくりな子、私の強い子、得手不得手のアンバランスが大きい子では当然遅れる事に成ります。

以上の二点を御理解頂いた上でお話を進めます。

3 虐待死への過程

何度注意しても言う事を聞かないので叩く、叩いても言う事を聞かないのでまた叩く。これを繰り返している内に暴力がエスカレートして子どもの死を招く事に成ります。自己中心性の強い子ほど、私の強い子ほど、頭ごなしのダメ出しに抵抗して、繰り返し自己を主張するため、親からすれば、言う事を聞かない、と映る事に成ります。

4 何度言っても言う事を聞かないのは何故か 聞く耳が無くなってしまいうから
何度言っても言う事を聞かないのは、聞く耳が無くなってしまっているからです。
なぜ聞く耳が無くなってしまおうのでしょうか。

人間誰でも「ダメ」と言われて気持ちの良いはずはありません。ダメダメしょっちゅう言われて居たら、「またダメって言うんかい。もう聞きたくない！」と言う気持ちに成るものです。頭(心)の中の耳を塞いでしまいます。そうなったら聞く耳が無くなってしまいうのですから、何度言っても言う事を聞かないと映るのは当然です。

5 聞く耳

例えば、換気扇の回っている部屋で人の話を聞いている時、話が面白いと思って聞き入

って居たら換気扇の音は聞こえませんが、話が面白くない、聞いてもしょうがないと思ったら、換気扇の音が聞こえて来るでしょう。

人間の脳には沢山の情報が入っているのですが、心は情報を選択しているのです。ですから、聞く、とは聞きたい気持ちがあって、聞き取る、聞き入る、と言う事なのです。

6 聞く耳を作る方法

子どもに聞きたくないと思わないように導き、親の言う事がスーッと耳に入るようにする方法、聞きたい気持ちを作る方法は“凶星を言う”です。

「ダメ」を言う前に“凶星を言う”をやって聞く耳を作ってから、「～しよう」と子どもに指示すると、子どもはスムーズに言う事を聞くように成ります。

7 “凶星を言う”¹⁾

“凶星を言う”とは親が子どもの気持ちをズバリ言い当てて言う事です。

“凶星を言う”は子どもに聞く耳、いわばダンボの耳を作る種蒔きです。

子どもが悔しそうに泣いて居たら「悔しい」、嬉しそうに泣いて居たら「嬉しい」、悲しそうに泣いて居たら「悲しい」、泣きながら怒って居たら「怒ってる」、指示に従って後片付けしなかったら「片付けたくないんだ」、人のおやつを取って食べちゃったら「もっと食べたいんだ」、ぼっこを振り回してたら「振り回したいんだ」、高い所に上がったら「登りたいんだ」など、日頃から子どもの気持ちを断定的にズバリ言って置く事を“凶星を言う”と称します。

“凶星を言う”を繰り返していると、子どもの心に「お母（父）さんは僕（私）の事分かってくれてる。だから味方だ。おっかないけど良い人なんだ。そういう人の言う事は聞かなきゃ」という気持ちが芽生える事に成ります。

8 魔法の言葉

4歳A君の母親は、A君は言う事を聞かない、癩癩が凄い、ストーブにお茶を掛けたり、ガスコンロを弄って小火を出したり、とんでもない事をする、と言って見えました。

“凶星を言う”を説明した後の1ヵ月後、母は「どうしても言う事を聞いて貰わなきゃいけない時、この子の気持ちを言うようにしたら、ギャーギャー言うけど結局は私の言う事を聞いてくれるようになりました。『魔法の言葉』として使わせてもらってます。」と述べました。

診察終了時、お絵描きして待って居たA君に母が「帰るよ」と声掛けしましたが、A君は鉛筆を放せずに居ました。すると母は「もっと使いたいんだね」と透かさず“凶星を言う”をしました。その結果A君は直ぐに鉛筆を筆箱に返して、ぐずること無くスムーズに退室しました。

A君の母は日頃から“凶星を言う”を実行している事が分かりました。

9 マッチポンプの2歳児

2歳7ヵ月の男の子は、思い通り行かないと物を投げる、母に怒られたら母が目を離れた隙に4ヵ月の弟を叩く齧る（“江戸の敵を長崎で討つ”を実行できていると言う意味で本児は中々の智者です）と言う事で見えました。

母には“凶星を言う”を説明し、叩いた時には「叩かないで」ではなく、「優しくね、優しく、撫で撫でだよ」と言いながら母が弟を撫でる仕草を見せて下さい、とお願いしました。

1ヵ月後再診、母が「叩きたいんだ」と“凶星を言う”をすると、ハッとして思いっきり叩かなくなった、との事。たまたま母が弟の頭を物にぶつけてしまったため頭を撫でたら、児は弟の頭を叩いてから撫でたとの事で、これはマッチポンプの智者である事を説明しました。

マッチポンプとは、意図的に揉め事を起こして置いてその後で鎮め役を引き受け、その過程で利益を得る人、を言います。自作自演の一人芝居、狂言とも言えます。

2歳児としては頭が良いと考えられるのです。

初診2ヵ月後、物を投げるのが少なくなりました。

3ヵ月後、弟に叩く齧るは無くなり、押すぐらいに成りました。父に怒られると母を叩きに来るとの事で、弱い者への憂さ晴らしが無くなった点を肯定的に説明しました。

10 教室でも使えました

思い通り行かないと母や姉に噛み付く、叱ると叩いて来る、という心配で連れて来られた3歳3ヵ月男児の母には、「～したかったんだよね」など子どもの気持ちを代弁して言い当てるように、と提案しました。

1ヵ月後、母親は乱暴は半減したと述べた後「教室でも使えました」と呟きました。どういう事かとっさに判断できなかったので質しますと、母は中学校教師で教室がざわざわした時「静かに」という命令的な声掛けではなく、「もう勉強飽きたんだね、もうちょっと頑張ろうね」と生徒の気持ちを言ってから励ますようにしたところ、教室運営が楽になりました、と言う事でありました。

11 我慢 脱中心化 二重人格

我慢とは、自分で自分にこっちよりあっちの方が良い、と言い聞かす事です。我慢とは“負けるが勝ち、次が有るさ”“逃げるが勝ち、次が有るさ”と次に期待するように自己説得する事です。

ですから、良い子の自分と良い子ではない自分の二重人格を作れるように成らないと我慢は難しいのです。脱中心化が進み、他者との折り合いを付ける事が可能に成る必要条件は我慢であり自己説得であり二重人格なのです。

万引きして捕まってしまった警察官は頭（心）の中の善玉が悪玉に負けてしまったという訳で、4歳以下の幼児に退化してしまって居たと言えましょう。

12 良い子の〇〇に成ったね 良い子の〇〇どこ行ったあ

態と怒られる事をする、親の目を見ながら悪戯する子は良い子でない事を少しではありますが意識出来ている事に成ります。つまり、二重人格の芽生えがあると言う事です。そうでなければ、正々堂々怒られる事、悪戯をする筈です。

自分が良い子をやれているかやれていないかの気付きを促し、叱られないような振舞をする意識と行動を育てる方法は以下の通りです。

誉める時「良い子の〇〇に成ったね」と言葉掛けするようにします。「良い子だね」ではなく「～に成ったね」の「に」が重要です。これは種蒔きです。

そして、叱る前に「良い子の〇〇どこ行ったあ？良い子の〇〇御出でえ。良い子の〇〇に成ったら、お母さん嬉しいなあ」と言ってから、その後で叱るようにします。

自分がした叱られる事態を悟る時間を子どもに差し上げ、「良い子の振る舞いをしなきゃ」という気持ちを醸し出すためです。

「悪い子」と言うと逆ギレする子が居て、逆ギレしたら聞く耳が無くなってしまうので、「悪い子」は言わないようにした方が良いのです。

当初は「良い子 अच्छ」 「良い子 いない」 「良い子の〇〇入らない」 など反論したり惚けたりしますが、繰り返し続けていると「良い子ここ」「良い子居る」「良い子に成るから」とか言って親におべっかを使うように成ります。親にすれば内心ニコニコ出来るように成ります。

「良い子ここ」「良い子居る」「良い子に成るから」と言う事は二重人格を充分意識出来ている事に成りましょう。

13 外で服を脱いじゃう どこでもオシッコしちゃう ～～

暦年齢5歳4ヵ月、発達年齢2歳6ヵ月、女兒Yちゃんは発達がゆっくりです。

外で服を脱いじゃう、どこでもオシッコしちゃう、地下鉄で唾を吐く、冷蔵庫を荒らす、気に入らないと物を投げる家から飛び出す、話し掛けても答えない、と言うことで見えましたので、“凶星を言う” 「良い子のYにな成ったね、良い子のYどこ行った？」を母に提案しました。

5歳5ヵ月。母は、凶星を言うようにしたら、外で服を脱がなくなった、他の問題行動も減った、質問に答えるようになった、報告して来ました。

5歳6ヵ月。問題行動は殆ど無く、良い子に成ろうとしている事があり、スーパーで欲しい物を買ってもらえないとゴロンとするけど、言い聞かせると切り替えが早く成りました、との事。

5歳7ヵ月。「御免なさい」と言って謝れるように成り、他の子の行動を見て見習うよう

に成りました。親からだけでなくお友達からも学び取ろうとする姿勢は4歳児が可能に成る社会的学習の芽生えですので、本児の発達年齢は急速に伸びたと言えます。

1 4 OKの声掛け

日本人が人を褒める時は物凄く良くてできた時ですから、子育てに難渋していると「この子、褒める所が無いんです」とまで言って嘆き、褒め上手に成れていない親御さんは結構居ます。その場合の提案がOKの声掛けです。

子どもが当たり前でできている事を当たり前のようにした時、例えば、いつものように靴を履いたら、いつものようにボタンを嵌められたら、「OK、それで良いよ、またやろうね」と、OKサインを出しつつ声掛けします。

親は褒める程の事でもないと思っけていても、子にすれば「良いって言われた」と認められた事に成りますから、達成感充実感が高じて、褒められたように感じられる事に成ります。

親は褒めてなくても褒め上手に成れる事に成りましょう。

1 5 二つ先のアナウンス

落ち着き無いと映る子、切り替えに時間が掛る子には、次の行動予定の一つ目二つ目を順繰り順繰り言い聞かせる、と良い効果が生じます。四つ五つ纏めて言うと、初めの方は忘れてしまつて三つ目ないし四つ目から始めるので、親にとっては言う事聞かない、猪突猛進の子に映る事に成ります。

二つずつだと、5割の確率で親の言う事を聞く事に成ります。子どもが親の指示通りに動けば褒められます。本人は見通しが立つ事に成り、親にすれば指示が通り易くなったと感じられるように成ります。

1 6 切り替えの時に大泣きする

2歳3ヵ月女児は癩癩が酷い、遊びを終える時に我慢が出来ず大泣きして崩れてしまう、との事でしたので、母には“凶星を言う”“二つ先のアナウンス”を薦めました。

1ヵ月後。「まだ遊びたいんだよね」と凶星を言うようにしたら、『遊びたいよ』と言いながら終われるように鳴りました。

2ヵ月後。落ち着いて来て聞き分け良くなりました。公園では勝手に行かないで『かか(母)見てて、向こう行く』と断ってから行くように成りました。

5ヵ月後。我を張るのは時にあるけど、随分扱い易く成りました、と。

1 7 カウントダウン

子どもがやりたがるが親としてはやらせたくない事をしたがる時、頭ごなしに駄目出しすると、返つて拘り、切り替えが遅く成る事はしばしばです。

まずは「3回やって良いよ、3回もやれるんだよ、3回もだよ」と「3回も」の「も」を強調しながら言って先に子どもの顔を立て、「後2回」「後1回」と数え（何が1回か決めなくても大丈夫）、「3回もやったね、いっぱいやれたね。」と満足感達成感が高じるように煽って置いてから、「さあ、おしまい、〇〇しよう」と次に親がして欲しい事を声掛けすると、私の強い子でもスーッと次の行動に移れる事が良くあります。

数概念が分かっていない子でも有効です。何故なら「も」が強調されていますから、子どもの心の中では、数と言う論理性より、沢山やれたと言う気持ちの方が勝ってしまう事に成るからです。

18 自傷他害の重度知的障害男児

15歳D君、有意語は無く、IQは測定不能との事。

心配事は以下の通りでした。物を投げたり壊したり、自分の手を噛む、頭、鼻を叩く、手を抑えても体格が良いので力が、強いため大人の手を振りほどいて叩いてしまう、友達を叩く、日頃まとわり付いて来る子が寝ている間に叩いた（相手の隙を突いて恨みを晴らす智慧、相手の弱点が分かる）、目つきが険しくなって先生を叩く（衝動的では無く意図的行動）、訴えが通らないと唾を飛ばす（憂さ晴らし）、態と食卓の食物をひっくり返す（第一次反抗期の知恵）。

上述のエピソードからは、IQが測定不能でも、本児には3歳相当の智慧がある事が分かります。ですから、二重人格を意識できるように育む事は可能と考えられました。

そこで、母に“凶星を言う”“優しく叩こう”を説明したところ、母は「やって見る」と積極的に言いました。

初診1ヵ月後：家でも学校でも落ち着いて来て自傷は減ったが、要求が増えて大変との事。母親には児の心に“分かってもらえてる感”が醸成されたため、「もっと分かってくれ」という思いが募って、母への試し行動が増えたのですと説明し、“二つ先のアナウンス”“カウントダウン”を追加説明しました。

2ヵ月後：自傷は更に減って週に2回だったが、他害は先生を2回、父を1回叩いたと言う事で、“OKの声掛け”を追加提案しました。

3ヵ月後：自傷は殆ど無い。他害はたまにあるが、力を入れないで叩くとの事。手加減が出来ているので、「良い子のDに成ったね」「良い子のDどこ行った」が有効である筈と母に説明しました。

5ヵ月後：乱暴は無い。おだった時に人を叩くのがあるくらいとの事。

8ヵ月後：乱暴は無い。態と唾を吐くのはある。

1年後：怒って久しぶりに物を投げたが、小さい物を投げた、とのこと。

19 虐待防止の鍵 “凶星を言う”

ダメ出しを連発して子どもに聞く耳を失わせてしまうから聞き分け無いと映るのです。

そうすると、言っても分からないなら叩いて躡てやるという意識がエスカレートして虐待に繋がるという事に成ります。

親自身が子どもの心に聞く耳（ダンボの耳）を作れるように成れば、聞き分け良い子と親も思える事に成りますので、虐待防止は可能に成り得ましょう。

“凶星を言う”が虐待防止の鍵に成り得ると言えましょう。

引用文献

1) 石川 丹：癩癩、衝動、攻撃、同一性保持など問題行動に対する精神療法－好い事作り療法－. 日本小児科学会誌 114:439-446, 2010.